若手コーナー

人生を変えた大学院生活

沖縄県立宮古病院内科（琉球大学医学部第一内科）　金城　武士

はじめに

2004年4月から始まった臨床研修義務化により、ほとんどの医学部卒業生は市中病院で初期研修を受けるようになりました。大学とは違い市中病院では臨床3年目ともなればある程度のことは任され、また自信がついてくる頃なので、この時期にわざわざ大学に戻って研究をしようと考える人は少なくなってきているようです。私が医学部を卒業したのは2000年ですが、1年目から大学の医局に入局し、3年目で大学院進学の道を選びました。より多くの臨床経験を積むべきこの時期に4年間ものあいだ研究生活に身を置けば、臨床医として大きく出遅れることは覚悟していましたが、大学院を卒業された多くの先生方が臨床の第一線でご活躍されているのをみて励まされ大学院への進学を決意しました。大学院ではどっぷりと基礎研究に漬かっていましたが、研究生活を通して知識のみではなく不思議と臨床にも通ずる物事の考え方や探究心を培うことができた気がします。今回、本コーナーに投稿する機会を得ましたので、大学院の魅力について私の経験をもとに書いてみようと思います。進路に悩んでいる後輩達の一助となれば幸いです。

大学院での研究生活

学生時代にほとんど勉強をしなかった私は、先輩医師から発せられる分子生物学的な用語に全くついていけませんでした。「TNF-α」、「CD4, 8」、「Th1細胞」という単語が出てくるとアレルギー反応を起こしてしまっていたのです。しかし理解を深めようとするとき、必ず分子生物学用語の壁にぶちあたりました。ポケットベルに振り回されず、腰を据えてじっくりと勉強してみたいという思いから大学院進学を決意しました。私の所属する琉球大学医学部第一内科にはいくつかの研究グループがありましたが、川上和義助教授（現在、東北大学教授）の率いるグループは少なくとも年に一回は国際学会で研究成果を発表し論文業績も多かったため、実験漬けになることは覚悟でこのグループへの配属を希望しました。研究テーマは感染免疫で主に呼吸器感染症における自然免疫細胞の役割について研究を行っていました。川上先生と先輩達との間で交わされる「宇宙語」を理解すべく、まずは「免疫学への招待」という入門書を購入し勉強しました。また初めのうちは英語の論文を読むことは大変なストレスでしたが、理解を深めていくうちにあまり苦痛とは感じなくなりました。実験は時に深夜にまで及び、その後に動物舎の掃除をすることもよくありました。一つの結果を得るためには多大な労力が費やされることを身をもって経験しましたし、期待していた通りのデータが出たときの喜びはひとしおでした。臨床の現場では既知の情報を利用する立場となりますが、大学院は逆に新たな知見を発信する場となります。解明されていない現象の機序についてこれまでの知見をもとに仮説を立て、その仮説の正当性を実験で証明していくという一連の過程は、振り返れば知識を教え込まれてきた経験しかない私にとって非常に新鮮で楽しい作業でした。

大学院での貴重な経験：論文の査読と国際学会での発表

川上先生のもとには英語論文の査読依頼がよくきていました。査読とはある雑誌に投稿された他者の論文を評価することで、雑誌の編集者は論文のテーマに精通した複数の研究者から意見を求め、最終的に掲載するかを決定します。川上先生は論文の査読を大学院生にも回し、意見を求めていました。査読ではその論文の斬新さ、当該分野に与えるインパクト、実験方法や実験結果の解釈が妥当かなどの評価をはじめ、誤字脱字がないかまでも確認します。そして最終意見としてAccept（受諾）、Revise（要修正）、Reject（拒否）かを判断します。査読が回ってくると大変なストレスでした。なぜなら、論文の隅から隅まで何回も読まなくてはいけない上に参考文献までも孫引きする必要があり、多くの時間を割くことになるからです。しかし査読は自分にとって非常に貴重な経験となりました。筆者は自分に都合のよい論文を引用する傾向にあり、何も考えずに読んでしまうと筆者の世界に引き込まれる危険があるため常に内容を疑いながら論文を読むこと、論文の「売り」を冒頭で簡潔に述べ早いうちに読者を惹きつけておかないと、読者は何を伝えたいのかがわからなくなり次第に読む気力が失われてしまうこと、誤字脱字が多いと内容がよくても印象が非常に悪くなること、などなど学んだことはたくさんありますが、一番よかったのは論文の欠点をいかに暴くかの訓練を通して、自分自身の研究を第三者的な視点で見つめ、弱点が何かを見極めることができるようになったことでした。

国際学会での発表も大学院ならではの貴重な経験となりました。大学院の４年間でアメリカの２都市（デンバー、サンディエゴ）、カナダ（モントリオール）、オーストラリア（ヘロン島：東海岸の小さな島）に行きました。国際学会では国籍を問わず様々ななまりの英語で質問されます。私はポスター発表しか経験していませんが、身振り手振りで何とか質問に答えていました。英語で海外の研究者とディスカッションできたことはとても自信になりました。また国際学会の自由奔放な雰囲気は国内の学会では味わえない独特なものでした。モントリオールで開催された国際免疫学会では夕方までのプログラムが終了した後に大きなホールを貸しきってサーカスを観賞し、それが終わったかと思うと今度は舞台でロックコンサートが始まり、恐らく数千人はいたであろう参加者は先ほどまでサーカスをしていた場所に降りてきてノリノリで踊りあいました。みんな馬鹿騒ぎしていましたが、学会発表に至るまでの苦労を吹き飛ばしているかのようでした。

最後に

多くの先生方のご指導、ご協力があってこそ、充実した大学院生活を送ることができました。特に川上和義先生、藤田次郎先生、斎藤厚先生、また苦楽を共にした大学院の先輩後輩の先生方に深く感謝申し上げます。現在、離島医療に奮闘しておりますが、大学院生時代に得たものはかけがえのない財産になっています。臨床医としての長い長い道のりの中で、決して無駄ではなかった貴重な４年間でした。大学院への進学を考えている方がいらっしゃれば、是非その扉を開いてみてください。そこにはきっと無限の可能性が眠っています。